

◎グループ協議【20・30代、40・50代グループ】

○枝村副部長 皆さん、移動していただきまして、どうもありがとうございます。

これからグループ討議を進めさせていただきます。

大きくやってしまうとなかなか意見が言いづらいたろうということで、皆さんに意見を言っていただきやすい環境をつくったつもりです。

先ほど説明がありましたが、ここで検討する内容は、これまでの分野別評価、全体評価を踏まえまして、市民にわかりやすく提示する年代別の健康づくりの取り組みとなっております。このグループでは、20代・30歳代及び40代・50歳代の健康づくりの取り組みを検討していきたいと思っております。

なお、グループで出された意見については、事務局がまとめて後ほど報告することとなっております。皆様から忌憚のないご意見をいただければと思っております。

それではまず、事務局から資料の説明をお願いいたします。

○事務局（筒井母子保健係長） それでは、説明させていただきます。

母子保健係長の筒井です。よろしくお願ひいたします。

まず、20・30代の健康づくりに向けた取り組みについてご説明させていただきます。資料は94ページになります。

20・30代の欄をごらんください。

なお、この資料は、分野別の中間評価において、各分野で課題につながる現状として示したものをまとめたものとなっております。

20・30代の現状としては、20代女性で、痩せの割合が高い、運動習慣のある人の割合が低い、30代男性で、睡眠により疲労がとれない人の割合が高い、ストレスを感じている人の割合が高い、20代女性で、多量飲酒者の割合が高い、30代男性で、喫煙率が高い、家庭における受動喫煙の頻度が高い、妊婦で喫煙している人がいる、20代で、歯科健診受診率が低い、子宮がん検診受診率が低迷している、虐待をしていると思うことがある親は、身近に相談できる人がいなく育児に自信がない、事故予防の意識が低い傾向にあることがわかりました。

次に、92ページをごらんください。

これらの現状を踏まえまして、テーマを「健康づくりの大切さを知り、生活習慣を見直そう」としております。

内容といたしましては、毎日朝食を食べる、自分に必要なエネルギー量を知り、主食・主菜・副菜をそろえて食べる、無理なダイエットはしない、運動習慣を身につける、適量飲酒を心がけ、休肝日をつくるなど、望ましい生活習慣、食生活、食習慣に関する取り組みを上げております。

また、子宮がん検診や歯科健診の受診率が低いことから、取り組みとして、定期的に健康診断・がん検診を受ける、かかりつけ歯科医で歯科健診を受けるもあわせて上げており

ます。

この世代は、仕事や子育てに忙しい世代でもあり、睡眠により疲労がとれない人の割合が高い、ストレスを感じている人の割合が高い現状があるため、取り組みとして、十分な睡眠をとる、悩み事を誰かに相談するを上げております。

また、子育てに関する取り組みとしましては、妊娠中、授乳中は飲酒しない、妊娠中、授乳中は喫煙しない、受動喫煙を防ぐ、育児に関する悩みを相談する、妊娠に気づいたら早期に病院を受診して妊娠届出書を提出し、定期的に妊婦健診を受けることを上げております。

説明につきましては以上です。

○枝村副部長 ありがとうございます。

今の説明に基づきまして、20代・30歳代の市民に向けた健康づくりの取り組みについて検討していきたいと思います。

もう一回、確認しますけれども、94ページの課題のもとで、92ページのこうあるべきだというものをつくられたということでいいですね。

○事務局（筒井母子保健係長） はい。

○枝村副部長 これは、市民にとってわかりやすく、行動に移しやすいような具体的な表現の検討や重視すべき取り組みの絞り込みの整理の仕方、また、新たな取り組みの追加などについてご意見をいただければと思います。こういう人であればいいということです。

皆さん、唐突ですが、ご意見があればお願いします。

もしなければ、順次、ご意見を伺うことでいいでしょうか。

それでは、宮崎委員からいかがでしょうか。

○宮崎委員 この内容についてですね。

○枝村副部長 内容以外でもいいですので、場がにぎやかになることをお願いします。

○笹渕委員 これについて、全体的な評価の数字はどのようなのでしょうか。

○枝村副部長 この場面は、評価の数字ではなくて、アドバルーンみたいな、こういうものを上げるのに、これでどうでしょうかということです。具体的な取り組みは、この後のほうにいろいろと数字が出てきますが、これは中間評価ですから、評価して、次からこうやっていきましょうという大まかなことを決める形になっています。

さっきも笹渕委員が指摘されていましたが、具体的に5を8にするというものではないのです。

○笹渕委員 わかりました。

続けてください。

○宮崎委員 30代の睡眠により疲労がとれないことの課題に対して、多分、働き盛りで、時間外労働があつて、質のいい睡眠がとれないのかなと思うのですけれども、十分な睡眠をとるといのが目標なのではないでしょうか。保健指導だともっと具体的にいろいろなことをいうのですけれども、その実態に合わせて、十分な睡眠という表現ではなくて、質のいい睡眠

眠、深い睡眠など、うまく言えないのですが。

○枝村副部長 確かに、睡眠により疲労がとれない人の割合が高いということなので、それに合わせて十分寝ればよいということだと、余り目標にならないような気もするのです。

○宮崎委員 例えば、質のいいというか、脳と体の疲労のとれやすい時間帯の睡眠、昼寝の活用など、細かくなってしまうのですけれども、私たちはそういうふうには保健指導や健康教育をしているので、その年代に即したものでないと絵に描いた餅になってしまわないのかなと一つ思いました。

○枝村副部長 昼寝ですが、これは20代・30代が主ですから、学生ならできそうですけれども、働いていたらできなさそうですね。

○宮崎委員 私たちは、昼休みをうまく活用しましょうと指導しています。昼の10分は夜の2時間に匹敵しますよと言って、10分、15分の仮眠をとるだけでもすごく疲労回復になりますと具体的に指導しているのです。ですから、そういうできそうな、取り組みやすいようなことを言っていくのが大事かなと思います。余り細かく言えないので、どうやって表現していいか、難しいですね。

○枝村副部長 次に、野宮委員、何かご意見ございませんか。

○野宮委員 今のところと関連するのですけれども、十分な睡眠というのは、ストレスも入っているということでもいいですね。

20代・30代の表現ですけれども、「健康づくりの大切さを知り、生活習慣を見直そう」で、次に、40代・50代を見ると「運動や休養を上手に取り入れ、生活習慣病を予防しよう」とあります。20代・30代は仕事をやっているという前提で一番働き盛りということを見ると、運動と休養を上手に取り入れて生活習慣病を防ごうというほうがマッチすると思います。20代・30代が運動や休養をちゃんととることによって、40代には継続されるという前提になってくるので、そのほうがよりいいと思いました。

○枝村副部長 20代・30代も、40代・50代も、一応、働いている年齢だと思いますが、これを分けたのは何か理由があるのですか。野宮委員からも指摘がありましたけれども、上のところを変えた理由はあるのですか。よく見たら似たような文章ですが、ちょっと違うような気がするのです。

○事務局（石川健康推進担当課長） 20代から40代にかけて、ほぼ同じ部分もあるのですけれども、40代からは、例えば、がん検診や特定健診、メタボなどの対応を迫られてくることもあります。ですから、20代・30代と40代・50代の課題に相違があるということで、その部分について区別しております。

○枝村副部長 個別はもちろん違うのだけれども、上の大きな表題の「健康づくりの大切さを知り」はどの年齢でもそうかと思うのです。20代・30代と40代・50代を分けているのだけれども、これはどういう意味があるのですか。

○事務局（石川健康推進担当課長） 10代のときに生活習慣を身につけてきているので

すが、それを実践する世代が20代・30代ということで、それをきちんともう一回見直しましょうというところが非常に重要になってきています。40代・50代になると、生活習慣病を見直すだけではなくて、高血圧といった疾患が出てきますので、そういった部分も含めて、より予防に向けた取り組みが必要になってきますというところです。

○枝村副部長 ご苦労されているのはよくわかるのだけれども、20代・30代でも運動習慣のある人の割合が低いと出ていたり、脂質異常の割合が高いと言われると、40代・50代がちょうどいいのではないかという気もしてしまいます。

西田委員、いかがですか。

○西田委員 中身については、専門家ではありませんので、特に言うことはないのですが、けれども、議論を聞いていると、僕もそうですが、やはり20代・30代というのはがむしゃらに仕事を一生懸命やっていて健康のことなんて正直考えていない世代だと思うのです。それが40代になって、飲んだら次の日に残るとか、残業したら次の日は疲れているということで、少し健康に気を遣い始める世代かなと感じた部分です。

あとは、今回、こういうものを通じて、いかに周知していくかということで、今、個々の人たちが属しているネットワークで、成人であれば会社であり、町内会であり、もしくは大学や学校だと思いますが、そこにいかにうまく周知していくかが重要な部分かと感じています。

実は、札幌商工会議所でも、今、税制・社会保障委員会という委員会がありまして、こちらで取り組みを始めているのですが、社会保障費がこれだけふえていく中で、それを企業としてもできるだけ抑制支援に努力していきたいということで、昨年、食生活を見直しましょうということで、塩分を少なくして健康寿命を延ばしましょうという講演会をやりました。今年度もそのような取り組みを会議所としてもやっていきたいと思っていて、皆様のお知恵もおかりできればと思っていますので、よろしく願いいたします。

○枝村副部長 笹渕委員、ご意見はありませんか。

○笹渕委員 このタイトルの中で、幾つか気になるものがあるのです。

20代・30代の若者に対して、受動喫煙を防ぐという項目は必要なのでしょうか。むしろ、逆に、喫煙をすることに対する習慣をとめる、少なくするようにしたほうがいいのではないのでしょうか。極端な話をすると、受動喫煙を防ぐというのは、たばこを吸っている人のそばに行くなということでしょう。この意味がよくわかりません。

それから、かかりつけ歯科医に行って歯科健診をするとありますが、20代・30代の健康づくりでうたう必要があるのでしょうか。40代・50代ならまだしも、20代・30代の健康づくり云々で歯科医のことまで入れる必要があるのかという感じがします。

さらに、今言われたように、十分な睡眠をとるというのは難しいのではないかと思うのです。これを習慣づけるというのはいいことなのかもしれないけれども、朝早く出勤しなければだめだという問題もあるし、夜は夜までいろいろな出来事を知りたい、見たいということで、なかなか難しい問題だと思うのです。これを実行すると若者がおじいさんにな

って若者でなくってしまう感じがするので、これほど多くの項目が必要なのかなという感じがします。

毎日朝食を食べるということは、実は0歳～19歳までで大いにやらなければだめなことです。今の若い人たちは、とにかく朝食をとらないです。会社に来てみてよくわかるのは、朝食をとらないで来るから昔とは全然違うのです。ここでうたっているのがいいのかどうかは考えものですけれども、これは0歳から20代、30代、40代、50代も全部うたってもいいことではないかと思います。

そういうふうに感じましたが、それからどうするかということはまた別問題でいいですね。

○枝村副部長 幾つか、ご指摘がありましたけれども、いかがでしょうか。

受動喫煙については、確かにご本人がやめるのが一番いいのだけれども、やめさせるではなくて、ご自分にやめてもらうしかなくて、家の中で吸われると奥さんや吸わない人にすごく危害を与えるのです。

○笹渕委員 受動喫煙という言葉を使わないで、喫煙を減らすとか少なくするというふうにしていったらどうなのでしょう。

○枝村副部長 そのほうが望ましいのですが、喫煙をやめろとも言えないのです。ご本人がやめるのが一番いいのですけれども、吸わない人がたばこの害に遭う受動喫煙が一番よくないのです。

○笹渕委員 喫煙に対して迷惑をかけないような方法をとるとか、そういうことでいい言葉遣いが見つからないものですか。受動喫煙というのは、自分ではどうしようも防げないので、たばこを吸う人のそばに行かない、たばこを吸ってもいい店には入らないとするしか方法がないわけです。

○枝村副部長 数字がないからわかりませんが、20代・30代の方は、ほかの世代から見て喫煙率が低いのではないのでしょうか。

○事務局（小田原健康企画担当部長） いえ、30歳代の男性は喫煙率が高いという数字が出ているのです。

○事務局（秋野母子保健・歯科保健担当部長） 担当部長の秋野でございます。

表現については、今、笹渕委員からご指摘があったとおり、受動喫煙を防ぐというのは、行くなという意味も若干あるのかもしれませんが、むしろ、喫煙をされる方が周りに受動喫煙をさせないという意味のほうがむしろ大きいです。委員もご承知のとおり、今、国の法律なんかも改正になって、受動喫煙をしっかり防いでいきたいと思いますという大きな流れにあります。

ただ、意味合いがわかりづらいかもしれませんので、表現については検討させていただきたいと思います。

もう一つは、歯科健診ですけれども、残念ながらこちらのテーブルには歯科医師会の高橋委員がいないので、歯科医師でもある私がかわりに説明させていただきます。

恐らく、高橋委員も同じ説明をされると思いますが、歯科疾患というのは痛みが出ない時期のほうが非常に多くて、虫歯にしても、歯周病にしてもそうなのですが、自覚症状がない間にどんどん進行して行って、痛みが出たときに気づいて歯科医に行っても手おくれなのです。特に歯周病に関しては30代に急速に知らない間に悪化して行って、40代から歯周疾患が増悪するという傾向もあるものですから、恐らく20代・30代にはしっかり普及啓発してほしいと高橋委員もおっしゃるのではないかと思いますので、そこはご理解いただければと思います。

以上です。

○枝村副部長 大西委員、お願いします。

○大西委員 今の受動喫煙を防ぐは、やはり表現を見直して、喫煙者は受動喫煙に配慮するとか、具体的にわかりやすいような表現に変えたほうが良いと思いました。

30代の男性は喫煙率が高いということで、40代・50代を見ると、喫煙をしないとか禁煙すると書いてあるのであれば、30代男性は喫煙しない、禁煙すると入ってもいいような気がするのです。こちら側が強制的に禁煙させられないですけども、何に気をつけたらいいかは、禁煙したらという選択肢として入っていれば良いと思います。40代・50代に入れるなら20代・30代に入れてもいいと思いました。

あとは、悩み事を誰かに相談するというのも、身近にいなければ市の窓口のご利用をとか、相談する人がいない割合が多かったのだとしたら、誰かに相談するだけだと、相談する人がいないという場合もあると思うのです。身近にいなければこういう窓口のご利用をみたいな感じの短い文言でちゃんとバックアップ、サポートする体制はあるということがわかるようにするといいいのではないかと思います。

子育てのことを表題に書くのかどうか、健康づくりの大切さと生活習慣の見直しというだけだと、子育て関係、妊娠、出産というあたりの表現をここに盛り込むと2行ぐらいになってしまうのかもしれないので難しいかもしれませんが、そのあたりは生活習慣の見直しに含めてしまってもいいのかどうか少し気になったところです。

もう一点は、適量飲酒というのが一般の人にはわかりにくいのです。適量はどのぐらいという話になるので、1合程度とか何か具体的な目安が入っていたら、そのぐらいにすればいいというのが一般の人にわかりやすいので、具体的な量を書いたほうが良いのではないかと思います。

○笹渕委員 個人的な差があるのでしょうかけれども、医学的には適量というのはどの程度の量なのでしょうか。

○枝村副部長 すごく差があるのですけれども、日本酒であれば1合程度、ビールであれば1本程度です。ただ、強い人は全然飲めるのです。

医学的だと、例えば、飲んだ後の肝臓機能を調べて行って、どれぐらい耐えられるかを調べるのですが、一応、多量飲酒の基準というのが3本とか3合なので、ここに出てくる多量飲酒者がどうのこうのというのは3合とかビール3本が一応基準になっているようで

す。

先ほどの大西委員の意見について何か返事がありますか。

なければ、時間的に次に進みたいのですが、いいですか。

(「異議なし」と発言する者あり)

○枝村副部長 続きまして、中途ですけれども、40代・50代について進めたいと思います。

事務局から説明をお願いいたします。

○事務局(荒戸健康推進係長) 健康推進係長の荒戸です。

40代・50代の健康づくりに向けた取り組みについてご説明いたします。

94ページの40・50代の欄をごらんください。

40代・50代以上の現状としては、男性で、肥満者の割合が高い、運動習慣のある人の割合が低い、睡眠により疲労がとれない人の割合が高い、女性で、ストレスを感じている人の割合が高い、50代男性で、多量飲酒者の割合が高い、喫煙率が高い、家庭における受動喫煙の頻度が高い、40歳で、歯周炎を有する人の割合が増加している、子宮がん、乳がん検診の受診率が低迷・低下している、虐待をしていると思うことがある親は、身近に相談できる人がいなく、育児に自信がない、事故予防の意識が低い傾向にあることがわかりました。

それらを踏まえて、93ページをごらんください。

40代・50代のテーマにつきましては、先ほど議論のありました「運動や休養を上手に取り入れ、生活習慣病を予防しよう」としております。

内容といたしましては、脂肪や塩分を控え、主食・主菜・副菜をそろえて食べる、外食や弁当などを購入する際は、栄養成分表示を活用する、運動習慣を身につける、喫煙しない、禁煙する、適量飲酒を心がけ、休肝日をつくるなど、40代・50代からふえてくる生活習慣病の発症や重症化予防に向けた生活習慣、食習慣の改善に関する取り組みを上げております。

また、特定健診及び子宮がん検診以外のがん検診の開始年齢であることや、子宮がん・乳がん検診の受診率が低いこと、歯周炎を有する人の割合が増加していることから、定期的に健康診断、がん検診を受ける、かかりつけ歯科医で歯科健診・歯周疾患健診を受けることもあわせて挙げております。

また、この世代は、20・30代に比べて社会的役割も大きくなり、より仕事や生活等多忙な世代であることから、睡眠により疲労がとれない人の割合が高い、ストレスを感じている人の割合が高い現状にあるため、取り組みとして、疲労やストレスをためないを上げております。

説明は以上です。

○枝村副部長 ちょうど秋野部長がいるので教えてほしいのですけれども、どうして40代・50代の人だけフッ化物入り歯磨き剤をやめて歯間ブラシやデンタルフロスとすご

く具体的になっているのか、もう一つ、虐待をしている親子の関係が全部外れているのですが、どうして入れなかったのですか。

○事務局（秋野母子保健・歯科保健担当部長） まず、歯科のほうですけれども、考え次第かと思います。このページは、どちらかというと、市民向けに具体的なメッセージを出すページと認識しています。どこまで細かいことを書くかという考え方によるかと思うのです。20代・30代については、まだ虫歯予防が大切な時期ですから、虫歯予防の具体的な方法としてこれを書いています。40代・50代は、歯周疾患の予防で、歯周病の予防のための具体的な方法です。歯科健診だけだと具体的な取り組み内容が寂しいかなということで、国の厚生労働省の健康日本21の数値目標、指標になっている歯間ブラシとデンタルフロスを書いています。

ほかの項目に比べて細か過ぎるのではないかということであれば、それはバランスをとって一つにしてもいいと思います。ただ、余り細かく載せないのも、総論的な話になって具体性がないことにもなると思いますので、ご意見をいただいて検討したいと思います。

あとは、虐待の関係ですけれども、非常に重要なテーマだと思うのです。この年代別健康づくりに向けた取り組みの性格が市民一人一人に対するメッセージだというような性格のページであるとする、市民一人一人に虐待に対して何か呼びかけるのは、具体的な虐待をなるべく早目に見つけたら児童相談所に早期に通告してほしいというメッセージになってしまいますので、今回はうまく入れられなかったという感じがします。

○枝村副部長 ご意見がなければ、また一周していいですか。

○宮崎委員 40・50代は、肥満者の割合が高くなるということだったのですが、60代・70代になると体重計に乗るといふのはあるのですけれども、この年代こそ体重をまめにはかって、たくさんふえたら戻りが悪くなるので、早目にやるのが重要ではないかと思います。

それから、20・30代のときもそうなのですけれども、運動習慣を身につけるといふのは、私たちは、ふだん、運動というところはすごくかみ砕いて言っています。少しでも歩行時間を長くして身体活動をふやすだけでも違うのですよというふうに具体的な感じがないと、運動習慣というところすごくハードルが高いような、ジムに行って何かをしなければいけないような感じを受けます。日常生活の中で、歩くことをふやすなど身体活動をふやすみたいな表現のほうがいいのではないかと思います。

あとは、健康診断とがん検診を受けた後はどうなのか、受けた後の精密検査、生活習慣など、結果にいろいろなことが書かれますので、受けるだけではなくて、それを行動にちゃんと移すことが大事ではないかと思います。いろいろな判定も出ますし、医師の指示を守るとか、年代が多くなると所見の重みも結構増すので、受けるだけではなくて、もう少しプラスしていかないと、本当に健診を受けた意味がないのではないかと思います。それがまた生活習慣の改善にもつながりますので、そこが大事かと思いました。

○野宮委員 今回の定期的に健康診断を受けるという話ですが、40代から特定健診が医療

保険者に義務づけられています。札幌市の状況を見るとかなり低いので、逆に言うと、ここは特定健診とはっきりうたってもいいと思うのです。そのほかに一般健診もあると思うので、生活習慣病だけを考えると、特定健診が主かと思っています。生活習慣病に重きを置くのであれば、これは特定健診という名称にしてしまったほうが市民としてはすんなり受け入れられると思います。

○西田委員 運動習慣については、先ほど宮崎委員がおっしゃったとおりだと思います。そのような表現のほうがよろしいのかなと思って聞いておりました。

○笹渕委員 20代・30代でほとんど言ってしまったのですが、同じことが出ているようなものですし、特に問題ないのではないかと思います。

ただ一つ、喫煙しない、禁煙するとありますが、この受動喫煙だけは何か表現の仕方があるような気がするのです。二つを別々に書かないで一つにまとめる方法があるのではないかと思います。

それだけです。

○大西委員 運動習慣のところで思ったのですけれども、身体活動をふやすということも大事ですし、今回から身体活動の指標を歩行時間にするということになっています。そうすると、1日何分以上歩きましょうみたいな意識づけで市民に訴えかけると何分歩いているかなと意識してもらえるようになって、この後、最終の市民アンケートをとるときに、何分歩いていますかと聞いたときにわかりやすいというか、大体何分ぐらいは歩いているというより正確な回答が得られるところにつながりそうな気がするのです。1日何分以上歩くことを目指しましょうという呼びかけにしたら、評価にもつながって、一石二鳥ではないかという気がしました。

あとは、体重計の話も出たのですけれども、肥満が課題なのに体重の話が出てこないと思ったので、何か体重を意識しましょうとか、肥満を予防しましょうなのか、適正体重を維持しましょうなのか、何かあってもいいのかなとは思いました。

それから、休養を上手に取り入れがどれに当たるのでしょうか。疲労をためないがそうなのかとも思うのですけれども、休養をうまくとるは睡眠のことなのか、表題には休養を上手に取り入れとあるのですが、睡眠でなのか何なのかというあたりも入っているといいかなと思いました。

○枝村副部長 皆さん、ありがとうございました。

皆さん、課題から表題を見つけるのは大変だと思うのだけれども、14とか15あるとなかなか難しいですね。ですから、数少なく、そして、おっしゃっていたみたいに歩行などより具体的なものをどうにかひねって出していただかないとだめかなと皆さんのご意見を聞いていて思いました。

あと2分ぐらいありますけれども、何かご意見はありませんか。

○大西委員 これ全部を守らないといけませんではなくて、一つでも取り組めそうところからやってみましょうみたいな注意書きがあってもいいと思います。これ全部を達成する

となったら、聖人君主ではないけれども、よほど素晴らしい人だなという感じになってしまう気がするのです。この中で一つでも何か取り組めそうなものにチャレンジしてはどうでしょうかというメッセージがあってもいいと思います。

○枝村副部長 皆さん、これができていないわけではなくて、どれかはできていて、どれかができていない方々だと思うのです。足りないところをうまくやっていただければいいと思います。

それから、先ほど申し上げましたけれども、この94ページの課題がここに100%入っているわけはなさそうなので、せっかく調べたものや今までの5年間のものが何もなくなってしまいますので、それを入れていただければと思います。しかも、数少なくても難しいかと思えますけれども、そこは皆さん優秀なのでやっていただければと思います。

何かご意見はございませんか。

○大西委員 年代別の取り組みを設定するという事は、年代別の達成率も今後評価していくことになると思います。普及啓発活動の参加者の人数というのは事業のところでは何件とか何人とありますが、狙った年代の人がどれくらい来ているかという評価が結構大事だと思うのです。

例えば、20代女性の多量飲酒を防ぎましょうということを普及啓発したいので、アルコールに関する何か講演会をやったときに、20代女性が一切参加していないとなったら全然意味がないですねという話になるので、そういう狙ったテーマでやったことには狙った世代の人がちゃんと来てくれているとか、全然来ていなかったのが少しずつでも聞きに来てくれるようになっていきますという評価ができる取り組みが確かにつながっていますねと確認できると思うので、来た年代を評価するのは難しいかもしれませんが、何かの機会に受け付けのときにアンケート用紙を配付して何十代とか、きょうのお話をわかりましたかみたいなアンケートをとるときに、20代女性とか30代男性という情報をとっておいて評価していくような工夫も今後検討していったらいいのではないかと思います。

○枝村副部長 貴重なご意見をだしたいと思いますので、そういうふうにやっていただければと思います。

ただ、一番聞いてほしい人たちはなかなか来ないです。今後の課題ですけれども、札幌医師会でも随分といろいろな講演会をやろうと思って一生懸命やりますし、がん検診でも一番検診を受けなければいけない年齢の方が来ないのです。それは課題として僕らも一生懸命取り組んでいます。

○大西委員 包括提携する企業は、市がやる事業に何か協賛みたいな形で賛同するけれども、結局は市がやることをサポートしているだけなのか、企業が独自に何かイベントみたいなものを開催しているのか、どっちなのか。

○事務局（石川健康推進担当課長） 両方あります。企業で研修会等を開催することもありますし、保険会社では保険のセールスマンの方が個別にがん検診の啓発をしていただくことも行っております。

○大西委員 従業員に対する教育をする取り組みもあるのですよね。

○事務局（石川健康推進担当課長） 包括提携を結ぶときに、企業として従業員にどのような取り組みを行っているか、皆さん意識が高い企業も非常に多いので、従業員に対して検診も含めていろいろな健康づくりの啓発をしていることも確認しています。

○大西委員 多分、市民講演会をやっても、30代男性はほとんど聞きに来ないと思うので、普及啓発を一生懸命やっても30代男性にはずっと情報が届かないまま何年も行くという話になってしまいます。包括提携の企業がみずから会社の行事として何かをやるとか、若干強制力が働くのかもしれないですけども、企業の中で教育を行ってくれるのだったら、札幌市の普及啓発ではそういう人たちに情報が届かなくても、その企業が取り組んでいることによって情報が届くことがあります。さっきの話もそうですけれども、30代の男性はほとんど話を聞きに来ないのですよねという情報があったら、それを情報共有の場で30代男性には私たちはお手挙げですという実態を見てもらって、そういう意味で企業の方の協力、従業員の教育という形もやっていただけると非常にありがたいという働きかけをしていくのがいいと思います。

○宮崎委員 私も、このご意見の中に書いたのですけれども、包括的提携をやっていることが情報として企業側には全然伝わっていないので、こういうことをやっていますということをごんな手段で企業に伝えているかの実態も見えなかったです。おっしゃるとおり、会社で健康教育をやるとみんな聞くのです。

ですから、今、健康経営もそうですが、例えば、健康さっぽろ21の指標に掲げているものに1個でも2個でも参加しましたということがあったら、健康さっぽろ21何とか企業みたいな感じでプレミアムのものをやると、今、企業も企業イメージがすごく大事なので、健康に参加している企業というものがもらえると、そういうことにより取り組むのではないかと思います。例えば、今、協会けんぽもそういう健康宣言みたいな形で始めていまして、そういう企業数がどんどんふえているのです。こういう条件があれば健康づくり宣言の事業所にしていきますというのは、職域の場ではトレンドといいますか、企業としてもイメージが上がるのです。企業にも何かメリットがあるような感じでやると、そういうこともお申し込みもされると思うし、ステッカーなのか何かわからないですけども、札幌市の健康さっぽろ21参加企業みたいな感じで何かあるといいのかなと思いました。

何かプラスに働くような取り組みがあると、企業はもっと参加してくるのではないかと思いますので、予算とかもあるので難しいところもあるかもしれませんが、そこはぜひご検討いただけたらなと思いました。

○枝村副部会長 西田委員、いかがでしょうか。

○西田委員 僕は、包括連携協定の話は余り知らなくて、不勉強で済みません。

今、企業にとっても健康経営は非常に重要な要素になっていますので、今後そういうような取り組みをする企業は間違いなくふえていくと思います。そこら辺の周知を含めてこれから私どもも動いていきたいと思いますので、ご協力いただければと思います。

よろしくお願いいたします。

○枝村副部長 それでは、ありがとうございました。

以 上